

令和6年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立明生小学校		NO. 1		
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT機器活用	【授業改革】 ①研究授業を年間一人1回行い、指導主事を年間3回招聘し指導を受ける。 ②校内研修で対話的な学びを実現するための方策を探る。 ③学び合いとICT機器機器の活用をつなげるために、・情報の共有・情報の操作などの要素を学習活動に取り入れる。 ○友達との意見交換での端末活用頻度週3回以上35%以上 【家庭学習の充実】 ④「家庭学習のてびき」を活用し家庭と連携していく。 ⑤4年生以上は日常的に端末を持ち帰り、学習内容の予習復習に取り組ませる。 ○毎日宿題をする80%以上 【読書活動の充実】 ⑥月に低学年6冊、中学年4冊、高学年2冊以上の本を図書室で借りることを目標とし、学期に1回多読賞を表彰することで意欲付けを図る。 ○本読むのが好き80%以上 【学習ボランティアの活用】 ⑦学習支援や実技補助などでボランティアの支援を受ける。 ⑧日本語指導や個別対応での支援を受けることで学力保障につなげる。	【授業改革】 ○単元によってICT機器を効果的に使える場面を考えながら使用することができた。 ○子ども同士が考えを一度に把握できるというICT機器のよさをいかした使い方を意識することができた。 ○友達との意見交換での端末活用頻度に関しては、アンケート項目からなくなってしまったため、正式な数値は出ないが、ICT機器の有無に関わらず、友達と交流しながら自分で考え課題解決をしているという項目で80%を示している。 【家庭学習】 ○毎日宿題をする 88% ○生活習慣チェックシートから、学力パワーアップシートに変更することで、自主学習ノートの提出が増えた。 ●4年生以上はほぼ毎日端末の持ち帰りをすることができたが、課題内容の充実が今後の課題となる。 【読書活動】 ●本を読むのが好き 70% ○本の貸し出し合計冊数（4月～12月）今年度は11, 275冊（昨年度は8, 830冊）と増加傾向にある。 【学習ボランティアの活用】 ○低学年向けに、読み聞かせをしていたいているお陰で、読書への意欲につながっている。 ○日本語指導や実技補助などさまざまな場面でボランティアさんに入っていたいているおかげで、円滑に授業をすすめることができ、子どもたちの学力保障にもつながっている。	・今後も職員全体で研鑽し、よりよい子どもの姿を目指して、全教職員が1回以上研究授業を行うなど、授業実践を行っていく。 ・端末活用に関して、明確な目的をもって活用する。特に、友達との意見交換の手段としての活用方法について更なる研修をしていく必要がある。 ・端末の持ち帰りに関して、日々の授業につながるような課題を出し、授業時間の確保を行っていく。 ・読書好きを増やすために、「本の福袋」「先生のおすすめ本」「図書委員のおすすめ本」「ラッキーナンバー」等の取り組みをしていく。	・子どもたちはきちんと話を聴いていて、自分の考えをもっているが、積極性に欠けるのかおとなしいのか、表現することができない。 ・ICT機器機器を効果的に使うことで、子どもが集中して学習に取り組むことができている。 ・単純に計算ができるだけではだめで、大人になった時、状況に応じて役立つ考え方を身につけていかなければならない。 ・たくさんのデータから必要なものを選ぶ、正しいものを見抜く力が必要。たくさんのものの見方や、問題を解決する方法を身につけなければならぬい。 ・廊下に、今学習している内容と関係のある本のコーナーがあって、それを読んでいる子どもたちがいて、良いなと思う。 ・ボランティア活動のあり方について、地域、保護者と方向性を検討していきたい。 ・授業に集中できない子どもに対して、いろいろ手を尽くしてもらっているが、ボランティアの力を借りるなどの手立ても必要だと思う。 ・今年度、新しくボランティアとして3名の方に協力していただけることになった。もっと増やしていきたい。 ・学校から持ち帰った端末でゲームばかりしている子どもがいるときいた。対策が必要。 ・自習がきちんとできている。終わりの挨拶まで自分たちでできる。授業規律が身につけているのはこれまでの取組の成果だと思う。1年生も2学期が終わる頃には成長が見える。 ・ICT機器を活用したグループ討議もある。いろいろな方法で討議をすることができる。 ・グループ討議でもっと積極的に話し合えたら良いと思う。
長期欠席対策	【安全安心な学校づくり】 ①「いじめ0」に向け早期発見・早期対応に取り組む。 ②子どもの些細な変化も見逃さないよう「相連報」による情報共有を行う。 【登校支援】 ③スクールカウンセラー、スクールライフサポーターと連携し登校支援を行う。 ④保健室・ほっとルームを活用し教室に入りづらい子どもが安心して過ごせる場とする。 ⑤校務支援システムを活用し連続で欠席している児童の早期発見に努める。 ○30日以上欠席児童8名以下	○毎学期いじめアンケートを実施し、いじめの早期発見・早期対応を図った。 ○ピンクシャツ運動に取り組んだ。 ○日常の問題行動については、担任や学年が中心となり指導を行った。また、指導については管理職や生徒指導担当と協議の上、学校としての対応を進めた。 ●初期対応時点で、児童や保護者の思いを正確に把握できないことがあった。	・いじめに関わらず、日常に起こるさまざまな問題行動について、早期発見・早期指導を徹底していく。 ・保護者との連絡を密にとり、児童について一緒に考えていけるような関係を築いていく必要がある。	・なぜ欠席しているのか、理由をつかんでもらっている。子どもに応じて必要なケアをしてもらっている。今後もSC等を大いに活用しながら、地道に進めてもらうしかない。
地域連携	【情報発信】 ①学校だより、学年だより、学校ホームページなど様々な方法で学校生活の様子を伝える。 ②児童・保護者へのアンケートを実施・分析し教育活動に活かす。 ○アンケート年2回 【学校運営協議会】 ③学校運営協議会と小委員会を開催し、学校経営や教育活動の協働を図る。 ○学校運営協議会年6回 【あいさつ運動】 ①地域や家庭と連携してあいさつができる子どもを育成する。 ○あいさつができる子ども90%以上	○生活目標にあいさつすることを設定し、点検活動に取り組んだ。（あいさつができる児童91%） ●あいさつするが相手に聞こえなかったり、あいさつしなかったりする児童が一定数いる。	・あいさつについては、強化週間だけではなく、普段から、教師自身も行い、児童の手本となるだけではなく、児童との人間関係を築いていく必要がある。	・地域にもっと学校のことを理解してもらわなければならない。 ・「知らない人には・・・」という難しい時代ではあるが、大人が自分から挨拶したり、「元気だね」と声掛けをしたりすれば、子どもも安心して挨拶ができるようになるのではないかと。 ・地域の人との関わりを増やして体験活動を行い、子どもたちの自主性を育てていくべき。 ・運動会で今年度のような、地域の人や保護者が子どもたちと一緒に参加できる機会を増やして、「みんなで楽しみましょう」という雰囲気をつくっていったら良いと思う。
非認知能力の育成	【キャリア教育】 ①「未来応援人」や「地域人材」を活用した授業の実施 ○各学年、年3回以上 ②中学校職場体験の受け入れと授業の実施 【自己肯定感の向上】 ①子どもたちの自己肯定感を高められるような取組を検討し実施する。 ②肯定的回答の平均より否定的回答の割合に着目し、改善に努める。	○「自分からちょっと○○週間」を」設定し、他者との交流や認められることで、自己肯定感の高まりに効果があった。 ○非認知能力の一つ、やりぬく力の向上をめざし、それぞれが立てた目標の達成に向けてとりくむことができた。	・普段から児童の良い行動を認め、褒めることで児童の行動を強化していく必要がある。そのためは、児童をよく観察しコミュニケーションを密にとることが必要である。	・様々な体験を経験する機会を増やしてあげる。その中で自分の得意なことや将来につながるものを発見できるかもしれない。 ・休み時間に上級生が下級生のところにきてハグしている姿がある。お互いの心の中できつと何かが育っていると思う。
人権教育の推進	①平田野中学校学区の「人権教育カリキュラム」に基づき、各学年で人権学習に取り組む。また、学習したことを行事や授業参観・通信等で発信し、保護者・地域への啓発を行う。 ②「仲間づくり研修会」をもち、学級の人権課題や児童につけたい力やその育成のための取組等について検討する。 ○研修会年2回 ③人権教育に関わる研修会や研究授業を行い、教師の人権感覚や指導力を高めるとともに児童理解を深める。 ④子ども一人ひとりの特性やニーズを把握するとともに、保護者との連携を図る。支援の必要な児童に応じた個別的教育支援を推進する。 ○個別的教育支援計画作成率100%、内容の充実	○各学年で、カリキュラムに基づいた人権教育を行った。また、児童会を中心に、年間を通して全校縦割り班活動を行ったり、特別支援学級の児童への理解を深めるための授業を各学年で実施したりした。これらの活動を通して、児童同士をつなぐきっかけとなり、様々な個性のある友達への理解につながった。 ○仲間づくり研修会は、1回目は各学年部で、2回目は全職員で行った。児童の実態から見つかった人権課題を解決するための取組や成果・課題を意見交流する中で、児童についての共通理解を図り、仲間づくりの方策を学び合った。また、夏季研修会では、外部講師を招聘し、教職員の人権意識を高めることができた。 ●支援の人員や時間が足りないで、全てのニーズに応えきれない。	・引き続き、取組を通信や校内掲示物（人権ポスター・多文化共生教育の取組など）で全校児童や保護者、地域の方に発信していく。 ・人権教育を授業参観で取り入れるなど、保護者への啓発を進める必要がある。	・「みんなで協力して助け合う」という言葉が掲げてある学級があり、いい言葉だと思った。「協力して助け合う」は企業でも同じ。永遠のテーマだと思う。 ・人権問題は大人になっても難しい問題。でも教えていかなければならない。地道にあきらめずに取り組んでいく必要がある。 ・仲間の大切さを実感できる行事を無理のない程度に行っていかなければならない。 ・被災した人たちは人権問題について身をもって体験するという。それほどの出来事がなければ、なかなか難しいものなのかもしれない。

- ※ 指導主事 教育委員会に在籍する職員で教職員の授業指導等を行う者
- ※ 端末 一人一台貸与されているクロムブック
- ※ スクールカウンセラー 月1回程度学校を訪問し教育相談を実施
- ※ スクールライフサポーター 子どもの学校生活の支援のための非常勤職員。登校しにくい子どもの家を訪問し登校たり、登校後も寄り添ったりして支援する。
- ※ ほっとルーム 不登校支援として令和5年7月開設。令和6年度は週4日9時間
- ※ 校務支援システム 一人一台端末にあるアプリケーションソフト。児童の欠席・成績処理・教職員の出退勤・教育委員会からの連絡等に利用
- ※ 未来応援人 旧「すずか夢工房」様々な経歴の方の人材バンク
- ※ 個別の指導計画 個別支援が必要な子どもの支援計画と支援記録